

「終わり」から「現在(いま)」を考える

「我々が人生の意味を問うのではなくて、 我々自身が“問われたもの”として 体験するのである。 人生は我々に、毎日、毎時間、問いを提出し、 われわれはその問いに、 詮索や口先ではなくて、 “正しい行為”によって 応答しなければならないのである」	「およそ生きることにそのものに 意味があるとすれば、 苦しむことにも意味があるはずだ。 苦しむことも生きることの一部なら、 運命も死ぬことも生きることの一部なのだろう。 “苦悩”と、そして“死”があってこそ、 人間という存在ははじめて 完全なものになる」
--	--

ヴィクトール・フランクル 『夜と霧』

1. 終末について

宗教改革者のルターの有名な言葉に、

「たとえ明日、終末が来ようとも、私はりんごの木を植える」

がある。

このルターの言葉を理解するには、「終末」をどう考えるか、という点が深く関わってくる。

キリスト教的には、

「終末 = 無限の真理(神・絶対善)の現世への到来
= 現世における**意味・歴史の全体的な完成**
= 現世が死に至り、無限なる永遠(神の国)が到来」

という理解になるのではなかろうか。

この理解によれば、現代人が考えるような、

「終末 = 虚無(無意味)が世界を全て覆っている状況」

ということにはならない。

なお、終末に「意味が完成するに至る」のか、「虚無に至る」のか、これは「理性的な論証」の範囲を超えた個々人の価値判断に属する問題である。

ジョン・ロックの『キリスト教の合理性』内の言葉を借りるなら「理性を超えた判断＝信仰」に属する問題ということになるだろうか。

2. 終末以前について

そこで、仮に、終末が「意味・歴史の完成」であり、「現在(いま)が終末以前である」とする。

であれば、「自分に与えられた日々の職務」を、自らの「本分」において、

「それが他者からはどんなに意味がないように見える事柄であったとしても、
現在(いま)において行い続けることこそ」が、

「終末における全体の完成」に対しての「自分の貢献」になりうると、

「自らの良心(soul)に照らして、了承するような人間の在り様」

を認めることによるのみ、

「他者からは何の意味もないように見えるかもしれない。

でも、私は今日、りんごの木を植えるのだ。

たとえ明日、終末が来るにしても」、

というルターという言葉が理解されえる。

3. 人の死について

キリスト教が、終末を、「現世の死」でありつつも、「全ての意味や歴史が完成している無限なる永遠が到来している状況」として考えることは上記の通りである。そこで、この考え方を

「個人の終末 = 個人の死」

という観点から、「個人の生」のレベルで展開してみたい。

すると、

「個としての自らの死 = 自らの生の意味・生の歴史の完成」

ということになろう。

であれば、「終末 = 現世の死」において議論したように、客観的にはどんなにつまらなく、無意味に見えるような行為であっても、それが、「自らの生の意味・生の歴史の完成」にとって「貢献になりうる」と、

「当人が良心(soul)に照らして、自らの行いを了承しうる限り」、

当人にとってはやはり「意味ある」行為になりうる。

4. 死と生の意味の連鎖について

映画『タイタニック』にて、音楽団が、沈みゆく船内で、乗員の多くがパニックに陥っている最中にあってなお、「死」を前に、「自分たちの本分」を果たすべく、演奏を続けていたシーンを思い出される方もおられるのではなかろうか。

船上で逃げ惑う乗客とは対照的に、彼らの「死」は、音楽家としての「本分」を全うしてきた彼らの「生の意味」を見事に完成せしめている。

そして、瞠目すべきは、「死によって完成された生の意味」は、彼らの死後にも生きており、その意味は「連鎖」し続けている、という点にある。

音楽隊のリーダーであるウォレス・ハートリーは婚約者マリア・ロビンソンからプレゼントされたバイオリンを自らの身体に括り付けながら死んだ。

このウォレスの「生の意味」はマリアの中でのみならず、全く異国の遠い極東の島国で駄文を認める私にまで「連鎖」している。

5. 「虚無性＝無意味性」と「未来への意味の連鎖」について

こうした「死＝意味の完成」によって生じうる

「未来への意味の連鎖」

を、私の好きな小説『ザ・ロード』からも考えてみたい。

『ザ・ロード』は、先日死去した米国の文豪コーマック・マッカシーによる黙示録的な小説であり、映画にもなっている。

コーマック・マッカシーの書く小説は、ヤスパースの云うような人間の「限界状況」を描くことによる宗教的な寓話性を有するものが多い。

この『ザ・ロード』は物語上の背景という点から、とりわけ、その性格が強く滲み出ている。

『ザ・ロード』の舞台は、人類の生活基盤や文明が完全に崩壊し、暴力が支配する中、人が人を食すような

「虚無的状况 = 生の意味や行為の意義が模索され難い状況」

に覆われている世界である。

虚無が覆う世界にあって、極寒の地の中、父とその幼き息子が互いの存在だけを支えに、「暖かい場所」を目的として、ただひたすら南の方角へ放浪する。

「幼き息子」は天使のように無垢である。

父親にとっては、虚無が覆う世界にあって、

「自らを“人”として生かしてくれる存在 = 自らの良き生の有り様を託しうる守るべき分身」

として「幼き息子」は描かれている。

「自らの生の意味を託す分身」としての「幼き息子」を前に、父親は自らの「本分」を全うしようと奮闘する。

そこで「本分」を果たそうとする父親の姿は、一方では、

「他者を日常的に壊し、食すことに何の疑問をも有しない人間 = 滅びへ向かう“獣”」

によって象徴される「虚無」に対し、「正義のための暴力」を全く躊躇しない「怒れる神」の有り様が表象されている。

他方では、

「幼き息子 = 自らの生の意味を託しうる守るべき分身
= 父親にとって真に意味ある存在」

に対し、父親は、ひたすら「良心的」で、「献身的」であり、「自らの犠牲」を厭わない。

物語上では、「死」を前にした満身創痍の父親が、生きていくための具体的な術だけでなく、一つ一つの行為の「倫理的な意味合い」も含め、自らの知識の限りを「幼き息子」に語っていく様が描かれている。

そこでは、「無条件に、人間に愛を与え、人間を下支えする神」として、神の有するもう一つの有り様が父親の姿を通じて表象されているとも云えよう。

虚無が覆う世界にあってなお、「幼き息子＝自らの生の意味を託す分身」を前に、父親は、「正義と愛の聖性」を捨てることはない。

なぜなら、自らが死してなお、「幼き息子」によって象徴される「自らの分身」に「自らの生の意味」が「連鎖」していくことを願っているからである。

まさに、ウォレス・ハートリーの「死＝彼の生の意味・歴史の完成」が、後世に「連鎖」していったように、である。

そして、映画「タイタニック」の音楽隊と小説『ザ・ロード』の父親によって表象される人間の「死」が、「各人の生の意味の完成」としての性格のみならず、

「各人の生の意味が死後に連鎖しうる起点」

としての性格をも有すとすると、人間にとって避けることのできない「死」は、「生の対極」にある「彼岸」というより、

「生の一部」としての「此岸」

として捉える方が自然である。

そうして、「死」を、「生の意味が連鎖しうる起点」という意味から、「自らの生の一部」として「此岸」的に捉えることを通じて、

「現在(いま)の人間の在り方」

がその未来において必然的に訪れる

「死 = 本分をまっとうした上での自らの生の意味の完成」

から「逆算的に」規定されうる。

不敬事件にて職を辞さざるをなかつた無教会主義の内村鑑三は、人の最も偉大な事業は、

「生き方を残すことである」

と述べている。

こうした考え方は何も内村のキリスト教思想に特有のものというわけではない。

古くは、アリストテレスが、『ニコマコス倫理学』の中で、人と社会の真の幸福(彼の云う「真理・絶対善」)の実現にとって、

「倫理的卓越性(彼の云う「徳」)は、知的卓越性に優先する」

ことを認めている。

「どういった生き方を我々は後世に残して死にたいのか」、こうした死を起点とした各人の視点から、人が「現在(いま)」をより良く生きる(well-being)ための一つのヒントがあるのではないか、とも考える。

5. 英雄的で倫理的に崇高な死のみが「意味」を有するのか

映画「タイタニック」の音楽隊と小説『ザ・ロード』の父親の「死」は「英雄的」であり、宗教的・倫理的な観点から「崇高」できえある。

では、「英雄的」でなく、宗教的・倫理的に「崇高」できえない、「非人道的」で、家畜のような「屠殺」を通じた「人の死」は、「意味」を有しないのだろうか。

この問題に直面したのがナチスの強制収容所において「人間による人間の屠殺」に直面し続けたユダヤ人である。

「ユダヤ人」というだけで「屠殺」され続ける同胞を前に、

「自らの死 = 自らの生の意味・歴史の完成」

などと考えることが出来るはずがない。

自らの死に全く意味を見出せない「虚無的状况」が強制収容所内のユダヤ人の「現在(いま)」をも支配する。

こうした確実に訪れるであろう

「自らの無意味な死 = 自らの虚無的死」

を前に、現在(いま)を生きる人間にとっての「救いとは何か」に関する洞察を与えてくれる著書がナチスの強制収用所で生き延びたユダヤ人精神科医のヴィクトール・フランクルによる『夜と霧』である。

フランクルは、非人間的な扱いを受けつつ、「次は自分が無意味に殺される番だ」と恐怖に慄きながら絶望的な日々を生きるユダヤ人の同胞を前に、次のように諭す：

「わたしは、彼らを前に、ひとりの仲間について語った。
彼は収容所に入って間もないころ、天と契約を結んだ。
つまり、自分が苦しみ、死ぬなら、代わりに“愛”する人間には
“苦しみに満ちた死をまぬがれさせてほしい”と願ったのだ。
この男にとっては、苦しむことも、死ぬことも意味のないものではなく、
“犠牲”としてのこよなく“深い意味”に満たされていた。
彼は意味もなく苦しんだり、意味もなく死んだりすることを望まなかった。
わたしたちも一人残らず、
意味なく苦しみ、意味なく死ぬことは欲しない」

このフランクルの言葉で、「無意味な死」を目前にした強制収用所内のユダヤ人が「現在(いま)を生きる意味」を取り戻していく様子が「夜と霧」には記載されている。

なお、現在(いま)を生きる私は、上記のフランクルの言葉を「あえて」次のように受け止めた：

「たとえ、われわれが明日屠殺されても、
われわれの苦しみや死には“意味”がある。
その意味は必ず“連鎖”する。
それは、“人間自身による人間性の自己否定に対する戒め”として、
つまり、“人間の有する原罪(エゴ)への戒め”として、
われわれの“苦しみや死の意味”は永遠に生き続ける」

そして、強制収容所内で虐殺されたユダヤ人たちの「苦しみや死の意味」は、

「我々人間は全て、悪魔的な側面を有している」

ことの「永遠の戒め」として、現在(いま)の世に一そして未来においても一連鎖し続ける。

6. イエス・キリストの死

人類の歴史上、最も後世に多大な意味を残した「惨死」は、「イエス・キリストの死」であろう。

イエスは実在した人間である。

映画『パッション』の序盤には、ユダの密告による「惨死」を覚悟した人間イエスが、自らの惨死を恐れる様子が描かれている。

また、十字架上では、磔刑によって、

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ
= わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」

との言葉を叫びながら、人間イエスは絶命する。

この「イエスの十字架上の死の意味」を、「あえて」キリスト教的に解釈するなら、

「人の良心(soul) = 天界から全人類に降り注いだイエスの霊」
が、

「真理(神・絶対善)の受肉者であるイエスの全人類に対する愛
= 彼の自己犠牲を通じた人類の原罪(エゴ)に対する贖い」

によって捉われている限り、人の行いも真理から大きく離反することはない。結果的に、真理へと至る「救い」の路を「心の平穩」のままに歩むことができる存在として、「人が自らの人間存在を内的に了承しえる契機」としての意味合いを持つ、ということになる。

つまり、この教えの地平においては、イエスの十字架上の「**惨死=自己犠牲←神の人類への愛**」の意味を「腹に収める」ことこそが、われわれ人間一人一人の現在(いま)を「平穏・平和」の状態に定めうることになる。

もっとも、この教えを受け入れるかどうか、という問題以前に、私は映画上で自らの惨死を覚悟しながら、

「**恐れを抱く人間イエス**」や

十字架上で神に対し、

「**なぜ、わたしをお見捨てになったのかと叫ぶ人間イエス**」

を「身近に」感じる。

それは、神聖な神の子であるにも関わらず、同じ人間によって「**徹底的に蔑まれながら**」、**十字架上で惨殺**された「**人間イエス**」の存在こそが、辛苦を生きる全ての人間に対しての「**時空を越えた同士・戦友**」としての意味合いにて、「**現在(いま)**」の私に対しても、「**同士・戦友**」として「**肩を貸してくれている**」ように感じることの「**身近さ**」である。

7. 「**終わり**」から「**現在(いま)**」を考えることの存在論的意義

現在(いま)の私の仕事上、ご年配の方々や大きな病をお持ちの方々と関わるものがしばしばある。

若くして自殺未遂をされた方々との交流もある。

「**死**」というのが私以上に切実な問題となっておられる方々である。

こうした方々との交流を通じて、「**死**」をどのように「**自分事**」として受け止め、「**彼・彼女たち**」に対して、何を語り、何をなしえるのか」と、考える必要に迫られることがある。

「入院をするので勇気を貰えるような言葉が欲しい」と求められた際には、自らの「責ある言葉」としてどのような言葉を当人に差し上げることが出来るのか、悩みに悩み抜いた。

彼・彼女らの「存在に響く言葉」を吐くには、こちら側もそれ相応の「覚悟」に基づく思考の整理が必要となってくる。

彼・彼女らが求めている言葉は、「自らの生と死に意味を与えうる言葉」であり、「現在(いま)、ここに、自らが存在する意味を了承させうる言葉」である。

「自らの生には意味がなかった」、あるいは「自らの死には意味がない」とする「自らの生と死への虚無性」に恐れ、また、苦悩している。

こうした「虚無(意味を見出せないこと)による苦悩」は、潜在的に、私を含む全ての人間が有している。そして、こうした苦悩から逃れえない人間の根源的な有り様がヤスパースの云う「限界状況」である。

特に、この苦悩(限界状況)が切迫している方に対しては、「彼・彼女の存在の声(人生の履歴や現在の悩み・病状)」に耳を澄まし、まずは「聴く」ことに徹しなければならない。

その上で、「彼・彼女にとっての“たった一回限りの生と死”についての意味」を「共に」考え、「活きた言葉(ロゴス)＝その方が勇気をもって現在(いま)存在することを指向しえる言葉」を「共に」探していく。

そのためには、「死」というものを自らの腹に落とし込み、その上で「私自身の現在(いま)がどのように規定されうるのか」を考察することなしには、彼・彼女らの「現在(いま)そこにある生と来るべき死」に私が対峙しえない、との問題意識にあって、本文は認められている。

云うまでもなく、「現世の死」のみならず「人の死」は、現在(いま)を生きる当人にとって、未来に属する事項である。

そして、「この世や自らの死をどのように考えるか」によって、「現在(いま)の在り様」が規定されうることを本文ではこれまで考察してきた。

この自らの考察上のクリティカルポイントは、「来るべき死」を「**意味の完成**」として捉えるか、「**意味無き虚無**」として捉えるか、という点にある。

キリスト教の枠組みでは、死を前者において捉えた場合、人は「永遠の幸福」へと至る「救い(心の平穏)」の道程に与れることになる。

他方、後者において捉える場合、キルケゴールの言葉を借りるなら、人は「滅び」へと至る「絶望的状况(絶えざる不安)」の最中にある、ということになろう。

こうした問いは、宗教や倫理に関係した存在論上の問いとしてのみ限定されるわけではない。

「**終端から現在(いま)のあるべき行為を考える**」

という観点からすれば、経済学上のダイナミック・プログラミングの考え方にも通じる部分がある。

また、より直接的に関係しうる理論的仮説としては、

「**未来への思惑が現在(いま)を形作る**」

とする自己充足的予言や合理的期待仮説の考え方にも沿いうる。

この意味で、本文を、「終わり＝現世と人の死」を手がかりとして、経済学におけるダイナミック・プログラミングや自己充足的予言および合理的期待の考え方を、

「**人間の実存 = 現在(いま)における人間各自の存在の仕方**」

のレベルに落とし込んで、当てはめてみた場合の「駄文」として読んでいただくことも可能なのかもしれない。

経済学的な文脈におけるより具体的な例としては、「死＝終わり」に際して、「借りっぱなし(世の終わりではノンポンジー条件の不成立, 人生の終わりでは債務免除)」を許容するか否かで、現在(いま)の時点の解は異なりうることを想起すれば良い。

重要なことは、経済学であろうが、宗教哲学の領域であろうが、第1節において紹介したジョン・ロックの言葉にあるように、特に、終末(世の終わり)の状態をどのように想定するのかという問題については、「理性を超えた判断(価値判断)」に属するという点にある。

終末をどのように想定するか、という点については「学問上の慣例」に従うことも非常に大事ではあるが、より大事なことは、「自分の“心”と“頭”で徹底的に考える」ということではなかろうか。

では、「来るべき死(世の終わり・人生の終わり)」を「意味の完成」として想定し、「終わりから現在(いま)のあるべき行為」を導出しえたとして、

「神経症的に当該の行為を守る必要があるのか」

あるいは、

「そもそも人間に守ることができるのか」

という「自然な問い」が生まれてくる。

知己の神学者によれば、この問いに対するキリスト教上の1つの回答は、自らの「不完全性への認識(それに付随する謙虚さ・遜り)」の上に、

「各自の本分において出来る限りで良い」

ということになる。

8. 「終わり」から「現在(いま)」を考えることの「私にとっての」存在論的意義

では、こうしたキリスト教の枠組みに沿うとして、「現在(いま)の私」がどのように規定されえるのかについて考えてみたい。

私は「キリスト者」である。

それにも関わらず、「教えを素直に信じる」ということをなしえない。

それゆえ、私の中で湧き出る信仰上の問いを一つ一つ解きほぐし、「自己了解」することなしには「前に進みようがない」。

というより、そもそも「前に進む気がない」。

まず、「キリスト者」として私が確認すべきは、旧約・新約に関わらず、常に、我々人間の存在を理解し、全てを受け止め、その無償の愛で人間一人一人を

「下支え = under-standing」

してくれているのが聖書で描かれる神の本性(我々人間への恵み=Blessing)である、という点である。

新約では、イエスこそがそうした神の本性を現世において実現する「神の代理人」ということになる。

なお、誤解されることが多いが、神は我々人間の「上」に居るのではない。

「下」に居て、常に我々人間を「無条件で支え続けてくれている」というのがキリスト教における神に対しての根本思想である。

私は、「上から私を支配しようとする神」ではなく、「下で私を支えてくれている神」であれば帰依して良いと考えて、キリスト者になった。

ちなみに—これも誤解されることが多いことであるが、ユダヤ教やイスラム教とは異なり—人間が努力に努力を重ね、「上」に行くことで、神からの「救い」に与ることが出来るとも考えない。

これはペラギウス主義としてキリスト教における異端信仰となる。

人間が自らの業(わざ)を鍛え、各人に与えられた「本分を全うする」ことは、「救い」の必要条件の1つではあっても、それで全く十分ではないのである。

より優先度の高い要請は、「神の業(わざ)＝人を下で支え続ける」神とその代理人イエスの本性を、「隣人愛」において、実現していくことこそがキリスト者には一義的に求められる。

しかし、私を含む人間には原罪としての「エゴ」がある。

それゆえ、「隣人愛」を具体的に行為化するには、相当な「覚悟」や「忍耐」が要される。

「バカになれ」

とこれまで何度も思ったし、今でも思うことがある。

「敵を愛せよ」の教えに至っては、私自身、何度も、この教えに「躓いてきた」。

今後も「躓き続ける」かもしれない。

こうした「私のキリスト教に対する懷疑」を見透かすかのように描かれた小説が、ペール・ラーゲルクヴィストの『バラバ』である。

物語の中では、キリストに代わって生き延びた人間の「エゴ」の象徴としての罪人バラバが、「キリストの磔とは何なのか」、「人を愛するとは何なのか」とキリスト教に対する様々な「**懐疑**」にあって、それらの意味を模索する姿が描かれている。

この意味では、私も罪人バラバである。

さらに、バラバとは異なり、私はキリスト者である。

それにも関わらず、キリスト教を「**妄信**しえない」。

キリスト教だけではない。

法や経済学は云うに及ばず、人間理性や国家も含め「**全てを妄信**しえない」。

もっと言えば、私は「**妄信そのものを嫌悪**している」ところさえある。

その意味では、バラバより「**罪深い**」のではと自己嫌悪に陥ることもある。

「にも関わらず」、こうした「**懐疑**」や「**妄信への嫌悪**」にあってなお、小説内でバラバが自らの死の直前に、最後に述べる次のような心境が私の現在(いま)の心境を少なからず占めていることも事実である：

「おまえさん(神・イエス)に委ねるよ。
おれの魂(soul)を」

私は模範的なキリスト者ではないかもしれない。

それゆえ、エゴに基づく、損得に関する功利的判断で済ませることが出来るような場合には、それで済ませてしまうようなところがある。

スーパーで食材を購入する際、私は健康を気にして購入するようにしているが、「神(聖書)に委ねる」ことはしないし、そもそもそんなことは考えていない。

日常の事柄は、「アディアフォラ」として、それで良いのではないかと自己了承している。

しかし、「いざとなったとき」、自らにとって大きな決断を迫られるときには、「聖書に立ち返り」、「委ねる」ようにしている。

もっとも、「委ねる」ことで損をすることもある。

そのときは、

「イエスもパウロも損しよったなあ」

と自らを納得させるようにしている。

功利的な判断基準で云えば、『タイタニック』の音楽隊、『ザ・ロード』の父親も損をしている。

強制収容所で「賭殺」されたユダヤ人たちに至っては、損という言葉を超えている。

終末前日に、りんごの樹を植えようとするルターは、損得以前に、「気がふれている」のではないかと、として周囲から誤解されるかもしれない。

結局のところ、『タイタニック』の音楽隊、「ザ・ロード」の父親、強制収容所内のユダヤ人、そして終末前日のルターたちと同じ境遇に立ったとして、私には「出来る限りのこと」しかなしえない。

こうした諦念にあって、「出来る限り」、わが身の魂(soul)を神(聖書)に委ね、「出来る限り」、この世では、

「下支え = under-standing と 理解 = understanding」

に徹してみようとは考えている。

そして、理解(understanding)には、「言葉(ロゴス)」が必要である。

新約聖書(ヨハネ福音書)では、

「言葉(ロゴス) = イエス = 人を下支えする神の分身」

としての意味を有する。

「活きた言葉」、というのはこの意味で存在するのであろう。

であるなら、「出来る限り」、この意味において「活きた言葉(ロゴス)」を紡ぐことを通して、

「下支え = under-standing と 理解 = understanding」

に徹してみたい。

きっと、それが私の「本分」なのだろうと自己了承している。

そうした私の「生の意味」が自らの死後にどのような形で「連鎖」していくかまでは全く分らないし、
分りたいとも思わない。

しかし、この世で人に怒られることはあっても、

「出来る限り、あの世で神と母から怒られないようにだけはしたい」

と心から願い、現在(いま)を生きている。

こうした将来(あの世)への私の想いが現在(いま)の私を形作っていることだけは確かである。

最後に、本文中で紹介した『夜と霧』から、以下のフランクルの言葉を引いて駄文を閉めたい：

「何人も彼・彼女から苦悩を取り去ることはできない。
何人も彼・彼女の代わりに苦悩を苦しみ抜くことはできない。
苦悩に満ちた運命と共に、
彼・彼女はこの世界で“ただ一人”，“ただ一回限り”立っている。
だから、苦悩を抑圧したり、安易な楽観でごまかしたりして、
苦悩を和らげるのを拒否する。
苦悩も一つの課題なのだ。
苦悩もわれわれの業績であった」

2023年10月10日

(同12日加筆修正)

中島 清貴

追記：本文は友人たちと訪れた幾つかの医療福祉施設でのご年配の方々や病と闘っておられる方々との会話、そして、難病と闘う友人との会話が契機となって記されたものです。大変な状況にあって、私たちとの会話に快く付き合ってくださいました方々全員に対し、心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。